第7回 環境教育講演会 (M-cafe7)

# 子どもの学びに火をつけろ!

ーユネスコスクール・八名川小学校における ESD の取り組み

遠 藤 晃 手 島 利 夫\* (\*江東区立八名川小学校)

## 確かな学力とESD

日本が世界に働きかけて実現したESD (Education for Sustainable Development) の10年が2014年 に終わりを迎えた。ESDは「持続可能な開発のための教育」と邦訳され、その意味は把握しにくいが、持続可能な社会を担う「人」を育てる教育と解釈することができる。

提唱国の日本政府は各省庁がそれぞれの分野でESDを推進し、文部科学省はユネスコスクールを実践拠点と定め、学校教育におけるESDを推進・普及してきた。学校教育におけるESDに関しては、「持続可能な社会」というキーワードはすでに現行の指導要領にみることができる。ESDでは知識の獲得だけでなく「課題解決能力の育成」が強く求められていることを考えれば、それは指導要領が掲げる「生きる力」の育成に他ならない。課題解決のためには様々な知識を持つだけでなく、知識を関連づける力が求められる。そこで、教科単元の間を関連づけた「教科横断的学習」が大切となる。同時に、課題解決の思考法だけでなく、解決したいという主体的な意欲・態度が必須である。だからこそ、子ども自身が興味関心を力に、自分自身の課題に取り組む学習が重要である。

この10年間にユネスコスクールは20校から800校を超えるまでに急激に増加した。今回のMカフェは、そのユネスコスクールの中でも、先駆的な取り組みでモデル校として位置づけられる東京都・八名川小学校の手島利夫校長をお招きして「ESDで学校が変わり、先生が変わり、子どもが変わる」というご自身の体験をもとに小学校におけるESDについて講演いただいた。手島先生は、ESDを指導要領の中に読み取り、学校教育の中で具現化することに尽力されてきた。総合的な学習の時間を核として教科単元をつなげ、それを視覚化したESDカレンダーを作成する先生の手法は、日本中の学校に普及し、それぞれの学校のESDカレンダーが作成されるようになった。このESDカレンダーは世界に向けても発信されている。一方で、先生が「学びに火をつける」と表現する学習・指導方法については、ユネスコスクールの4分の1程しか普及していない現実があるという。2014年11月に岡山と名古屋で開催されたESDに関する世界大会では、「ESDの10年」の成果がまとめられ、2015年以降のESDに関するアピールが発信された。2015年以降、「ESDの10年」は「グローバルアクションプログラム(GAP)」へと継承され、さらなるESD推進が図られることとなる。GAPではとくにESDの指導者不足が大きな課題とされ、教師や教員養成段階での指導者養成の重要性が増していく。

本報告は2014年3月1日に南九州大学都城キャンパスで開催したM-cafe7から手島先生の講演内容を記録したものである。講演には、小学校の管理職、教諭、市環境政策課、ESDに取り組むNPO、本学の教員や教員志望の学生など多くの参加者があり、それぞれの立場からのコメントをいただくことができ、それぞれのESDの現状とこれからを考える有意義な場となった。また、本学人間発達学部の教員養成の方向性を指し示す、示唆に富むものであった。随所にみられる「素敵でしょ」という手島先生の言葉にこそ、社会を明るい方向へ向かわせるESDの本質があるように感じる。

## 子どもの学びに火をつけろ!

~ユネスコスクール・八名川小学校における ESDの取り組み~

東京都江東区立八名川小学校校長 手島利夫

みなさん、こんにちは。

私は江東区立八名川小学校という学校の校長になって4年目、もともとは社会科の授業が大好きで、子どもたちにどんな体験をさせたらいいかな、ということで一生懸命やってきました。

私が32歳ぐらいの時に東京都の教育研究員という制度があって、そこで社会科の研究をしたいという者が東京都中から20名ほど一年間毎月集まって勉強を続けました。教育委員会がリーダーシップをとって集まるんですが、夏には合宿をし、最後には発表会をしました。その仲間と一緒に取り組んだ時のことです。

雪国のことを学習させるのに、子どもたちにどんなことをしたら学びが主体的になるか。東京の子どもたちに雪国をイメージさせ、そこの課題を解決させて、そして自分のことのような気持ちで追求ができるにはどうしたらいいかなっていう話がそこで進みました。

合宿で実際に雪国、新潟に行って雪を前にして 参加者みんなでああだこうだと。

従来ですと「家の上に1メートルの雪が積もるとこのぐらいの重さになる、それが乗用車何台分にもなって家がつぶれちゃうから、これが大変なんです。ギシギシって音が聞こえてね、うちは怖かったです」というような導入をしてたんですね。それもいいけれど、どうなんだろう。雪国の困る様子をいろいろ書き出して「重さ」よりもこの、たとえば2メートル位の「深さ」で「一面に積もってること」のほうが問題かもしれないね、じゃそれをどうやって問題として感じさせるか、なんていうことをやった。

考えた結果、授業では、2メートルの深さがあるということを伝えるのに2メートルの棒をもってきて、教室で「ここまで来るんだ。ここだけ積もってるんじゃなくて、この深さでここにも積もってるんだ。そしてこっちにも積もってるんだ



よ」「ドアを開けたら2メートルの雪があるっていうことは、どういうことなんだろうね」っていうような話をしました。

子どもたちは面白がって、4年生ですから「先生、その棒貸して」と言って持っていき、「先生の机も埋まっちゃうね」とか言って遊んでるんですね。そのうち「校庭へ行ってもいいですか」「いや、ちょっと待って。これをみんなが振り回したら、先生責任持てないよ」「いや、絶対ぼくたちはそういうことはしません」なんて話が進んでいって、今度は校庭だけじゃなくて「自分たちの町の中を、これを持って歩きたい」って言い出すんですよ。

どうしても行きたいって言うから「じゃあ、しょうがない。棒を持って歩く人、それから気がついたことを書き留めておく役も作ったらいいね」という話になる。で、「気がつく役の人、気がついたことを書き留める役の人がいるね、グループができたら来てごらん」というと「ぼくたちが一番だ」「なんでぼくらにはないんですか」「いや、じつはあるんです」などと言いながら棒を出してやったりする。1メートルの所にテープを貼ってね。2メートルの所にも貼ってる。大体これぐらい積もるんだねって。

それを持って町を歩くと、子どもはいろんなことに気がついてくるんです。たとえば、4年生の最初に習った火事や消防署の話。「消火栓が地面にあると、雪であのふたが開けられない」「立ち上がり式の消火栓も埋まっちゃうじゃないか」「買い物もできない」、それから「車が通れないよね。自転車も無理だよね」。それから4年の最初に習った、「ごみの収集ができなくなっちゃうよ、どうしてるのかな」など。

そういったあらゆる問題に気がついたのを持ち帰り、また次の日学校に来ます。それを整理して、こんな問題があるね、とグループで分けたりする。そこで、子どもたちの問題意識をぎゅっと集約化させるのに、六日町の助役さんに写真を撮らせてもらって、その方の写真を貼っておいて、そしてガチャッと(カセットの時代です)テープをONにする。と、声が聞こえるわけです。

「六日町ではね、2メートルの雪が積もって、 火事になっても大丈夫なように、私たちは準備 してます。火事は大丈夫です」「ごみの問題はど うですか」「ごみだってちゃんと集められるよう にしてます」「車は?」「大丈夫です。通れます。 私たちは雪に負けない工夫をしてるんです」。ガ チャッ。テープ終わっちゃいます。すると子ども たちは、なんかこう、釈然としないわけですね。 それで「どういう備えをしてるのか、やっぱりこ れも調べないといけない」と言って、そこから本 気になって計画を立ててね、勉強を進めてたんで す。まあそういったことが、いま思い起こせば、 子どもたちにどうやって火をつけるか、という最 初だったような気がします。

そのあとは、例えば「沖縄の暖かい気候を利用した生活の工夫」をどうやって実感させるか。「実感」させないといけない。私も一年間ぐらいそれを考え続けていた。「サトウキビはこんな長い葉っぱをして、これが台風の影響で根っこのほうが曲がってたりします。それでも上に伸びて、それを収穫します。梅雨の頃の季節はどうでこうで…」。そういう授業はあったわけですよ。あるいは「花を栽培して、その花を飛行機に載せて運んで、高く売れるからこれはいい」とか。だけど、子どもたちの「実感」に訴えるにはどうしたらいいのか考えたんですね。一年間考えて、こんなことをやってみた。

紙袋を持って教室に入ります。子どもたちは席についてます。紙袋をガサガサガサッとやって中から何か取り出して黙ったまま教卓に置く。授業は2月ごろです。教卓の上に、最初に出てくるのはまな板、その次に出てくるのは包丁。その次に、スイカなんです。子どもたちの目が、グワーッとこっちに集まるわけです。

私は包丁をスイカに当てます。ビシッと音がする。黙ったまんま、こう切るわけです。教室の中に甘い香りがバーッと漂ってね。子どもたちはじーっと見ています。で、「食べる?」ってやるとね、「うん」って言うわけです。「そうか」と言ってガサガサガサッと、紙皿が出てきます。それで子どもたちに、みんなこっちにおいでって言って、配って食べる。

食べていると、そのうち「先生、このスイカどうしたの」って言い出します。「どうしたと思う?」と言うと、「ずっと冷蔵庫に入れてたと思います」とかいろんなことを言う。で、「答えのヒントはみんなのお皿の上にある。誰かのお皿の上に隠してあります」と言ってしばらく待つんです。するとひとりが「これ、そうかもしれない」。何だと思いますか。スイカの食べたあとの皮をひっくり返すとシールが付いてる。沖縄県何とかって書いてあるんですよ。「沖縄かあーっ!

そんなことから子どもは沖縄にグーッと集中してきて、2月にスイカが食べられるのは沖縄の何と関係があるんだろう、ということになってくるわけです。それって子どもにとってはものすごいパワーになる。その暖かさというのを今度はグラフなんかを見て感じたり、そしてそれはどういう影響があるんだろう、というようなことになって、興味を持って学習を進める。

じつはこのあたりが、私がいま、<u>子どもの学び</u> <u>に火をつける</u>という概念でやっていることの、求められている話なんです。<u>「学びをどう作るのか」</u>ということを抜きにして、ユネスコスクールがどうだこうだというシステムのことだけやってたら、インチキになるわけなんで。

ユネスコスクールは675校になりました。それで各学校はそれぞれいい教育をしてるんです。ESDカレンダーというのを作ったりね。確かにそれを作ることによって学校は変わるんだけれども、だけども、子どもが本気になるかどうかに関わる「学びのスタイルをどう変えるのか」というところまで行くかどうかがいちばん大事なんだと、私は思っている。まあ、そんなこともあって、最初にこの話をさせていただいたんです。

では今日のお話の中心になる「子どもの学びに

火をつける!」ということで、話をさせていただ こうと思います。

# 1. ESDとは…知ってはいるけど、わかりにくいですね~

ESDということ、それからその意味ということについて、少し説明させていただきます。

Education Sustainable Development とは要するに「持続可能な開発のための教育」。ユネスコの課題なんですよ。私、意味わかんなかったんで、要するに「未来をどうつくっていくのか」ということなのかな、と理解するようにしました。

ユネスコは「人類の福祉の促進を脅かす、地球 規模の課題の解決に取り組んでいます」というん です。たとえば、課題というのはこういうものが あって、こんなのがあって、こんなのがあって(災 害・戦争・貧困・開発による南北格差・人権・情 報など)、そして環境の問題というのは大変重要 であるというのがあって、で、それらの解決に取 り組んでいますと。

だけど小学校で何か教えてこれを解決できるのかという問題も感じながら、でもそういう時代の中で生きていく子どもたちに、どういう学びを進めていったらいいのかなということで解釈しようと思いました。

いま675校になりましたよ、というのは、これは一つにはこの取り組みに値打ちを感じる人が多かったんだろうなというふうに思いますし、現代の重要な課題だと思ってます。

# 2. 「何のために学ぶのでしょうか?」という問いに

ESDに取り組む意味。八名川小学校の子どもたちにはこういう話から進めました。「あなたたちは何のために学ぶのですか」と。これを紙に書き、赴任して最初の全校朝会で聞いたんです。「何のために学ぶのか。その答えを私に教えてください。もしクラスで話し合ったら先生から教えてもらってもうれしいし、直接教えてもらってもありがたいな」と問いかけました。

そしたら出てきました。「私はなりたいものになるから、そのために勉強するんです」「それも

いいね」、「勉強ができるようになるためにです」「それも素晴らしいと思うよ」、「いい学校に入りたいからです」「そうです。そういう考えはあってもおかしくないと思います。それでどうするの」と言うと、「一流の企業に入りたいんです」。「それでどうすんの」と聞いたら、「楽な生活をしたいんです」。「そう、それも一つの考えとしてあっていいよ。それで楽な生活してどうすんの」というような話をします。

# 3. 彼らが生きる時代の課題と、彼ら自身が抱えている課題を踏まえて

次の週は、私のプレゼンで「それで、それだけでいいのかい?」ということで話します。君たちはどういう時代に生きていくのか。それから、日本の子どもたちにどんな課題があるのかという話をするよと、東日本大震災を報じる新聞記事を見せたりしました。

これは、3.11からもうじき3年(この講演の時点で)になりますけれども、あの前まではこんなふうになるなんて思ってなかったわけです。それで、もうこういうことは来ないのかというと、またいつ来るかわからないといわれているし、もっと大きな問題がある。まだ解決の目処が立ってないわけです。東京だって大震災が来ると思ってます。原発なんか「収束しました」って言ってるけども、ほんとにこれでいいのか。なんだか心配なことがどんどん膨らんできてます。

温暖化については、私が最初にこの資料 (2010年の予測図)を見た時は2007年で、3年後は未来だったんですが、でもこのとおりになりました。また、なんだか去年からニュースで、竜巻が増え、雨の降り方が普通じゃなくなってきたと。これ、どこどこに低気圧が来たからこうなりましたと言ってるけども本当にそうなのか。その問題の原因は、温暖化の深刻化にもあるということは否定できないんじゃないか、と感じています。それがみなさんご存じのようにどんどん進んでいるわけです。

で、2031年ってずいぶん先だなと思ってたんだけども、今から18年後。私の娘は38歳になりますが、その38歳の時どういう生活ができるの

か。どこで生きて何を食べるのか。何が飲めるのか。いま教室で教えてる子どもたちにとっても同じ課題が出てくるわけです。私なんかもう80近いから死んじゃってるかもしれないけども、どんな死に方するかなと心配になります。みなさんはどうですか、ということです。

子どもたちにも問いかけたんです。どんどん深刻化する、それは間違いないと思います。厳しい環境で、それからインターネットが普及したおかげで、あっという間にある国の政府が倒れたりというようなことが起こるわけです。今までだったらある国がだんだんおかしくなってきても、半年くらいかかってね、どうするか対応する時間があったのが、いまは一週間置いといたらころっといっちゃうわけです。そういう時代に生きてるわけです。

そして、子どもたちが抱える課題。自信をもてない。手をあげようとしない子どもたちが多い。 高学年になるとさらに、中学高校になったらもっとひどくなる。それで聞くんです。「どうですか。 このようで、ほんとにこの時代を生きていけるのかな」。そういう課題がある。

彼らにどういう将来が待ってるのかというと、企業でもいま結構ガタガタになっていて、立ち直るというけれど、基本的には日本の経済はもっと発展するかどうかには厳しい要素がいっぱいあると思うんです。

それから仕事はどうなるのか。例えば、ゆりかもめには電車の運転士も車掌さんも乗っていないけれど走ってます。駅に人はいません。レジ係はピッと全部自分でやれば、それでたいていはすみますよね。プログラマーなんて発注すれば、インドで作ってデータで送ってくるわけです。要するにこういう仕事はどんどん消えていくわけです。

そしてただ教えているだけの教育も消えます。だって教師という仕事は教員じゃなくても、教えるだけだったら講師ですむわけです。それで授業がうまくなければ解雇して換えればいい。そうすれば学校の経営は楽だよね、といって、今、東京の私立の高等学校なんかは結構こういう状況になってきてます。だから遠い話ではないんです。

要するにこういうふうにして仕事もなくなり、

その仕事も国内だけでの奪い合いじゃなく外国と 比較されていく。就職も難しくなっていく。そこ で求められるものって何だろう。それはこの先の 時代を生き抜いていく能力にもつながっているか もしれない、ということです。

## 4. 求められる能力は「生きる力」=ESDで目 指す子ども像

その時に求められる能力は、まず一つ目は<u>問題</u>に気づき、それを解決していくための手立てを考え工夫していけること。それからチームでものを考えるために創造的なコミュニケーションをする力。ネットや携帯で仲間と話し合うのがコミュニケーション能力じゃなくて、新しいものをどう創るのかということについて、一緒に知恵を出し合えるということが大事だと思います。そして<u>健康</u>や体力でしょう。

そうするとこれは、文部科学省が言っている「生きる力」と直結してくると思いませんか。この時代をダラダラと生きるんじゃなく、厳しい時代を切り開いて生きていく、そういう生きる力が求められていることはもう間違いない。それがESDで考える持続可能な社会づくりに直結する子ども像だと思うんです。

そうすると、ESDでやろうとしている教育の取り組みって、ユネスコスクールだけがやればいいのか、そうじゃないような気がします。やっぱり日本中のどこの学校の、どの子どもたちにとっても重要な課題で、それは日本だけじゃなくて、世界の子どもたちに、この先の時代を生きていくすべての子どもたちにとって、重要な問題だという気もします。

## 厳しい時代を生きる子どもたちに 求められる能力とは?

#### (厳しい時代を)生きる力

- 問題解決能力
- ・(創造的な)コミュニケーション能力
- ・健康や体力

# 5. 生きる力を誰がどうやって育むのか、今の教育でできるのか、どうやったらできるのか

でもどうやって進めると、生きる力を育てられるのか。ここがはっきりしてないのが、いま一番の問題です。うちは国語の教育をやりますという学校はある。でも、うちは生きる力の教育をやります、という学校はどれだけあります?算数の学力が低いから、学力テストの結果があまり良くなかったから、うちは算数の授業の研究をやりますという学校も、うんと増えた。それから体力のこともあるから、校内研究では、算数と国語と体育を取り上げている学校ばかりが増えています。でも、それで生きる力は本当に育つんですかっていうところまで、考えているかどうかが問題なんです。

# 6.ESDにどのように取り組むことで、どんな 価値が生まれるのか

ユネスコスクールがあれだけ増えたっていうことは、やっぱり価値があったんです。どういう価値があるのか。それを考えるときに、学校にとって、それから先生たちにとってどういう価値があるのか、それは子どもにとってどうなのか、そして保護者や地域にとってどうなのか、という視点を持って見ていくことが大事だと私は思います。

去年の3月ごろ、一年間の結果報告の際に、ユネスコスクールにアンケートも取ったんですがそれをまとめてみました。

一つ目は、「学校が活性化しました」。よかっ たですね。

それから「いろんな交流ができました。地域でも積極的にやりました」「評判が上がりました」。これは開かれた学校づくりが進んだんだと思います。いろんな人材に来てもらって、いろんな工夫がされた。

でもね、「教育方法が改善されました」については、25%の学校しか改善されたと答えていないのです。ここがユネスコスクールについて私が疑問を持ってる点なんです。つまり一見活性化し、一見地域に開かれました。でも教え方は今までと変わってません。それでほんとにユネスコスクールの中身ができてるんですか、と。さっき言った

ように、生きる力がほんとにそこで育つのか、ということを私は疑問に思ってる。大丈夫かな、と 心配してるんです。

「学校の方針が明確化された。活発化した」というのはものすごくいいことなんです。つまり、ある先生だけが一生懸命やってて、その先生が違う学年へ行くと、その学年の取り組みは消えてしまい、次の学年になったらまた教え込んでやっていかなきゃいけない、というようなことがなくなります。ですから、学校としてどうするかということをはっきりさせることができるという点では、この教育方針が明確化するというのは、これは絶対大事なことです。それは間違いないんだけれども、この「教育方法の改善」まで届くといいな、ということですね。

#### ESDへの取り組みを開始することで

- ・学校教育方針が明確化(85%)
- ※ 生きる力は、どの教科・領域で育てるの? そもそも、学校には「生きる力の時間」 なんて、ありません! 学校教育全体で育てるのです。

だから、生きる力の教育を中心にした 学校の教育課程そのものが重要であり、 全ての教科領域を横断的・総合的につない だ教育の姿が必要なのです。

#### 7. 視点をもって学びをつなぐ

さて、生きる力はどの教科で育てるんですか。 そういう時間はあるんですか。ないでしょう? そうすると、学校全体として、生きる力の教育を 中心としたカリキュラムがしっかりできていな かったらだめです。そしてそのカリキュラムを教 科横断的に、あるいは総合的につないだ教育の姿 が重要。これ、もう15年も前から言われてるん です。ただそれが形になっていない気もします。 なかなか難しいものなんだ。

なかなか難しいけれどね、でも、総合的な学修の時間の年間指導計画を作るときにNewESDカレンダーの形式で作ると、どの学校でもできるんです。

### 8.ESDは環境教育なのか

先生たちがいろんな教科、領域を横断的につないでいくという学びをつくる、持続可能な社会は

どう作るかという課題を考えるときに、ESDって結局は環境のことなんですよ、と言われたりするんですよ。でもそれはどうですかね。環境の問題というのは、八名川小学校の4年生が取り組めばそれですむんですか。八名川小の全校が取り組めば環境はよくなるんですか。あるいは東京中の学校が、あるいは日本がやればいいんですか、ということになります。

そうすると環境の問題というのは絶対的に今後、国際的な協力が必要になってくるのは間違いありませんね。PM2.5が降ってくるんだもの。それから日本が原発をボーンと吹っ飛ばしたら、世界に影響が行くんだもの。そういう危ない世の中。ということはやっぱり国際的な視点をもって大きな問題に取り組んでいかないといけない。

国際的に協力し合うには何が必要なのかというと、国も違う、言葉も違う、文化も違うし、宗教も違うんですよ。そういった人たちがお互いに理解しあう基盤といったら「そういう生き方もあるよね。あなたたちはそういう生き方をしていて、それは大事なことなんだね」と認め合える。異質への寛容というところになると思うんです。それは基盤としては文化理解となるかな。異文化の理解、あるいは自国の文化の理解というのが大事になってくる。

でもその文化理解、お互いに人として認め合いましょうというところからスタートするとしたら、人間として尊重し合う信頼関係がなかったら、文化も尊重もあり得ないし、となると命、あるいは人権といったことの理解が大事になる。そしてこれは環境がしっかりしてなかったら保障されない。

こうなってくるとこれらのことが全部つながってくる。大きなつながりの中に環境の問題もあるし、それを解決する手立ても見つけてかなきゃならない。すると「私たちはユネスコスクールとして環境の問題を中心にして教育を進めています」なんて威張ってんじゃないよ、ということです。国際的な理解とか文化理解とか、人として尊重し合うことに、取り組まなくていいのか。これ抜きにしてものは語れなくなってしまうということがお分かりいただけると思います。だから環境

教育をやっていればそれがESDになるんだというのは、私は違うと思います。環境教育、それはESDの一部かも知れないけども、それがすべてではない。人権教育、それもいいがそれがすべてではない。つまり私はね、この4つの視点、これをうまく生かして、教科・領域を結びつけるための視点として活用していくことが大事だと思った、それがこういうESDカレンダーということにつながったんです。

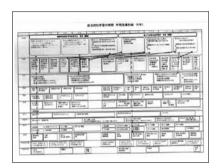


### 9.4つの視点で色分けする

ESDカレンダーというのは、ここの部分が大事なんです。つまり、図の左上の緑は環境ね。それから右下のクリーム色は多文化の理解。左下のピンクは人権だとか命の教育。民主主義もここに入る。右上の青は国際的な協力システムの理解です。システムの理解だけだったら、小学校6年生のところで国連について学びます。あそこで学習はだいたいできるんですね。もしやったとしてもユネスコとかユニセフとかの募金の時に行事として取り組んでやるとか、特活に入れたりする。その程度だったら、こういう項目にしないでいかなあなんて思ったんですけどね。でも、この4つで単元をつないでくってことが大事ということです。

だって今までは、それぞれの教科の学習のこの 横の流れだけで指導して、成績をつけて終わって た。でも同じ環境の視点であるとしたら、社会で 習う環境、理科で習う環境、そして道徳でもった いないということを習ったら、みんなつながって いくんじゃないか。つながりの中に、それと関係 したものを単元設定していけば、深まりができる んじゃないか。そこでは体験もできるかもしれな い、そんなふうに総合の時間を作ればいいのです。 これは総合的な学習の時間の研究発表会で出された紀要に載ってた、要するにカリキュラムなんです。総合の。線でつないでるけど、すごく分かりにくくてあまり見たくないでしょう。

だったら、要らないとこを消せばいい。それから色で分類してみたら、つながりが見えるでしょう?一目で見れる、イメージが持てるってことが大事だと思うんですね。



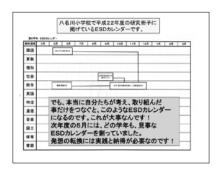
#### 10. 実践しながらわかることが大事

八名川小に行って、「東雲小で開発した、こういうのがあるんですよー」って見せたんです。そして、一年間研究をやって、授業もやって、それで作ったのが研究紀要です。研究紀要をバシッと作って、研究主任が原稿を持ってきたんですよ。そしたらね、スカスカなんです。ほんとに。

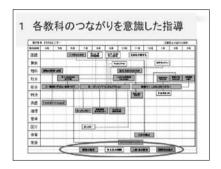
このとき2年生は自分たちは生活科で「あしたへジャンプ」のときに、「楽しかったよ、2年生」という国語の題材とつなぎました。それから学活で保育園と交流会をやったことを「つなぎました。そしてやりました」「そうですか」。でもこれを持ってくる2年生の先生を、私は尊敬しますね。自分たちの取り組みを堂々と持ってくるんですよ。

4年生も、そしてこれは6年生。「江戸の町を調べ、この町のよさを語ろう」みたいな。これしかつながらない。

つまり、先生たちの発想が変わるのには、もの すごく時間がかかるんです。見よう見まねで色を 塗ってつなげりゃいいんじゃなくて、自分たちで やってみるとここがつながった、という実感がこ の中にあるんだとしたら、それは私は尊重しな きゃいけないと思うんです。



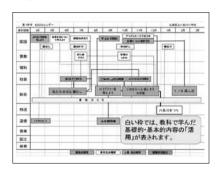
そしてね、研究紀要、そのまま載ってるんです。もうスカスカの研究紀要できました。でも<u>自分たちがやった単元については、先生たちは自信持ってた</u>んですよ。こういうことやったんですと。だからそれでいいんだ、ということにしました。でも次の年にね、「4月、5月で作ってね」って言うと、ちゃんと作るんです。



こうやって作るんです。ちょっとすてきだと思いません?ほかの学年もやりました。

この白い枠の所がいいと思うんですよ(白枠は学んだ基礎的内容の活用を表している)。たとえばね、国語で「読書生活について考えよう」とか、「新聞を作ろう」とかね。「アップとルーズで伝える」。アップというのは、わーっと寄って見てみると、あ、ここはこういうことがあるんだ。そしてずーっと引いて見てみると大きな景色の中からこんな所が見える。アップとルーズをうまく使いながら伝えましょう。こういう伝え方の工夫も入れながら学習を豊かにしていくということがいいじゃないですか。そうすると流れができる。

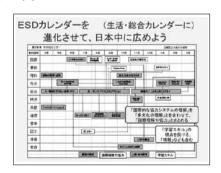
で、だんだんその線がね、だんだん右側に行く にしたがって太くなっていくでしょう。見えま す?つまり太くなっていくということは、その先 がだんだんこう集まってきて川のように流れて来 てここに来るんだよ、というような流れが意識で きる。視覚的でしょう?



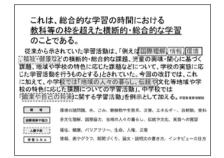
# 11.ESDの視点を取り入れて「生活・総合」を パワーアップするには

江東区内でどの程度「生活・総合」をカリキュラムを持ってやっているのか、私は心配になって調査しました。なぜかというとカリキュラムがなかったからです。結構いい加減な流用をしてる学校があって、105時間のうち70時間も鼓笛隊の練習に使っている学校があったりしました。それはほんとに総合なのか。調査するとね、上手に調査すると本音がぽろっと見えるんです。これも見直していくことが必要だ。それできちっとしたカリキュラムを持つことが大事。

で、私はね、ESDカレンダーというのは、うまく生かせば、総合的な学習の時間をもっと活性化するのに使えるんじゃないかと思った。それがこれです。



多文化理解、国際理解や協力というシステムを 一緒に入れちゃえばいいや。そして国際的な協力 のところの枠はさっきの白枠にしてしまって学習 スキルの活用でやろう。そうすると、今までの学 習指導要領で、こういう例が出てるんです。 そしてこれは指導要領の解説の中の文言です よ。これは全部分類できるんです。これに分類で きるんです。



例えば国際理解でしょう。情報でしょう。環境でしょう。「職業や自己の将来」といったら、これは生き方、命。こういうふうに考えたらみんなつながる。こういう問題、こういう問題、みんな入っちゃう。情報なんてのは学習スキルの中へ入れればいいじゃないか。

そうすると総合の学習でこういうことやったらいいですよという事例が出てたのを、みんなこのカレンダーの中に、色分けしながらつなげる材料にしてしまえばいいんです。そうすると総合的な学習カレンダーができる。それはカリキュラムと言えるかも知れない。

そしてね、東雲小学校というところで開発した時にはこの下の部分がなくて上の部分だけでやってたのが、下にくっついたんです。



つまり総合の時間にどういう狙いを持って何時間かけて、そして単元名はどんな。学習活動やその学び方、学習過程と、地域の人材との連携はここに入れたらいい。その単元でどういう方たちとつながって、どんな活動ができるのかということを計画の中に入れればいい。そうすると、学校に

は、あれも入れてくれ、これも入れてくれ、こっちもやってくれといろんなものが押し寄せてくるけども、それらを全部6年間のカリキュラムに、位置付くものは位置付ける、位置付けられないものはお断りする。そういう判断ができるようになります。だって学習指導要領に関係ないものは入れられないんだもの。だから、これは入れます。これは入れられません。ここには関係づけられる程度に触れます。そういう軽重をつけることもできるんです。

こういう地域人材との連携や学習コーディネーターとしての資質が、先生たちにぐっと育つんです。どこに入れたらいいのか。どんなふうに授業に組み立てていったらいいのか、というのもね。ほんとに役に立ちます。

### 12. 指導が楽になる

この間、パワーアップ交流会というのをやって、いろんな所から先生方や教育委員会の方がいらっしゃいました。遠藤先生の事例発表もあり、八名川の事例も発表して、あとでお茶会やってみんなで話した時に「ESDやっててどう?八名川小学校の先生って大変なんじゃないですか」と聞かれるんですよ。「あんなにやって大変でしょう?」。うちの先生たちはなんと答えたと思いますか。「いいえ、楽です」「楽になりました」って。



そして「私、いま6年生を受け持っているけども、何年生を受け持っても大丈夫です」「え、なんで?」「だって、どの学年にいっても、このESDカレンダーがあるんだから。何やったらいいのか分かるし、どうやってつないでいったらいいのか、もう分かるから、そんなに苦労しないですむ」って言うんですよ。いいでしょう。ね。



それでね、先生たちの机の上に一台ずつあるパソコンがネットワークになってる。共有フォルダのたとえば「2年の実践」を開けて「本日の授業の教材」というのをクリックする。そうすると右側にこんなのが開かれて、授業に使うワークシートやお願いの手紙だとかお礼状だとかグループ表だとか、全部この中に入っている。そしたら次の学年の人はどうしたらいいか。それを使ってちょっと見直してみる。

「この店は、今年は行かないけど、こっちは入れましょうね」とか「この手紙の日付を変えるぐらいでお礼状作成が済んでしまいました」とか。こうやって次のステップに進められる。そうすると楽でしょう。こういうの作っとけばいいんです。

そうすると学びは継続するし、毎年毎年ちょっとずつ工夫すればいいから、そのちょっとずつの 工夫を重ねてそれが4年間たまると、ものすごい 蓄積になる。

# 13. 「子どもの学びに火をつける」問題解決的な学習過程の重視

さて、いよいよ本丸です。<u>問題解決的な学習の</u> <u>充実</u>、この部分をどうするか。実際に授業をやる には、これだけじゃうまくいかないんです。もう 少し詳しく具体的にしていく必要がある。それは さっきの話でね、屋根の上の雪の重さから入るの か、それともまず2メートルの棒を持って町を歩 かせた方がいいのか。そういうところの部分です。 つまりどういう火の付け方をするのか。<u>子どもた</u> ちが本気になるかどうかが勝負です。

で、最初の所で学びに火をつける導入を工夫しようじゃないか。火をつけられないなんて授業者として能力不足だぞ、と言います。ちょっときつ

い言い方なんですけどね。要するに決まったものを教えこめばいいというのは保守の仕事で。でも、あなたたちは教師だったら、子どもが本気になるかどうか勝負しなきゃだめなんじゃないの、と。そのためにはこの部分でどういうことをやってね、火がつくかつかないかの勝負してほしいんだよ。そしたらあとは調べたりまとめたり伝えあったりすることをさせるんだけど、子どもは勝手にやっていくんだよ。「行けーっ」と言ったらどんどん行く。場合によっては「そんなに走るんじゃないよ」って言いながら先生はあとから追っかけてってね。途中で資料を、こんなのあるよと言ってあげたりする。

そこの問題を作る時にはね、ほんとにやりたいという「必要感」。そしてこれをやってね、うちの父ちゃん母ちゃんたちにも教えてやりたいよという「使命感」。それがこの町に生きてる一人としてね、この町の未来を、なんとか安全なまちづくりをしたいんだ。その中の一員としてやっていきたいんだという「責任感」につながる。それらを子どもが感じるような、そんな問題作りをしていくことが大事だと思うんです。

## 14. 認め合い、信頼し合える人間関係が育つ

こういうことをやっていくと、子どもたちはいろんなアイデアを出し合って学習は進むし、少数の意見も大事にする。だからいいことがいっぱい出てきます。あいつは成績悪いけども、なんて関係ない。アイデアだからね。成績悪いって言われてる子は、本音で語るやつなのね。建前で何か物事を進めるのは得意でない。でも、本音には世の中を変える力がある。だからそういう子の意見も大事にされるべきで、こういうやり方していくと、本音の大切さとかも見えてくる。

それから発信力もつきます。江戸の町を調べるということを1年目にやって、深川の町の良さは何だろうかと。いやあ、芭蕉でしょう。松尾芭蕉が暮らして「蛙飛び込む水の音」なんて歌。あすこが大事だと一所懸命調べ、それを模造紙に書いて発表しました。読みながら。

その時の写真を見ながら次の年の6年生に「去 年の人たちものすごくいいものをやったんだけ ど、この発表の仕方、どう思う?」。「これはないんじゃないですか、先生」「じゃあ、どうしたらいいの?」「顔見て話した方がいいんじゃないですか」「そうだね。でもそのためにはどうしたらいいかな?」「先生、原稿なんて覚えたらいいじゃないですか」。

で、ちょっとメモを持って自分の言葉でやりま した。

それから、同じテーマでやっていた2年目の発 表の様子の写真で、新聞に載った子がいるんです。 「なんでこの子は新聞に載ったかというと、つま りこの釣り竿を使ってね、」と説明した。すると 道具を使ったり、実物をこうやって見せるという ことは本当にいいことなんだって気がつくわけで すよ。その3年目の子は実物をやるだけじゃなく て、衣装を工夫します。江戸深川と言ったら「私 たち、これ着ていいですかしって浴衣持ってくる んですよ。で、あっちの班が浴衣着たら、こっち の班も浴衣だけじゃなくて下駄まで履いてくる じゃないですか。こっちの班はね、半纏を着て鉢 巻きして、のれんのかかった屋台を作ってね、そ こから首出して、屋台から身を乗り出してプレゼ ンし始める。そこんところに今度はね、こんなの が出てくるわけ(両天秤で桶を担ぐ仕草)。「変な のが出てきましたね。なんでしょうね | 「いや、 あれはね…。」。こうやって掛け合いを始めるわ けですよ。もう劇になってるわけ。劇仕立てで何 かを伝える。そして「あれはね、水を売りに来て るんですよ。この辺はね、」というような話になっ てくるわけです。

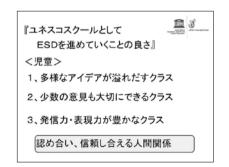
毎年6年生は5年生に向かってそのプレゼンをして、5年生はそれを見て次にそれを超えようとするんですが、去年こんなとこまでやってる、と今年の6年生はみんな困りました。去年を超えるにはどうしたらいいか。で、今年の6年生にはこう言いました。「去年のやつは素晴らしかったな。あれを超えるには技術的にはもう限界まで行ってる。君たちは、学び方を変えてみないか」

つまりね、去年の子たちはたいへん詳しく調べるところでは、先生と一緒になって調べてます。 一緒にビデオを見て止めてもらっては書いたりして。だから教師主導はまだ残っていた。「でも今 年、もしかしたら君たちはその学びを超えられるかもしれないんだけど、どうやったらいいだろうね」と言った。そしたらその日の午後から子どもたちは突っ走るわけ。つまり自分たちが調べたいテーマを探しに、江戸深川資料館に行ったり、図書館に行ったり、なんかそれぞれに。で、深川資料館から電話がかかってきました。

「校長先生、なんだか子どもたちが、ここのところ毎日、何人も来るんですよ。本当は子どもだけで入れちゃいけないんですが、八名川小学校だから、一応私たちくっついて対応してるんですけど。これいつまで続くんですか」って。そんなの分かんない。でもそれは申し訳ないから、学校でも何とか対応しますと言って、ちょっと路線を変えて。

つまりね、子どもたちには、この<u>学び方を進化させる力がある</u>んだと信じて、そして前の学年のものをどこかで見せていくというような<u>仕組みをうまく作っていけば、どんどん変わっていく</u>んですよ。毎年毎年子どもは進化する。そんな学校って素敵だと思いません?そういう学校を作っていくのが大事なんです。

で、伝え合うことがとても大事。八名川まつりというのをやるんですけども、ここで各学年がそれぞれプレゼンコーナーを作る。そこに自分たちが学んだことを、楽しみながら体験してもらうようなコーナーを作り、全校が「前半のグループやりなさーい」「これで終わりまーす」「じゃあ、後半のグループやりまーす」「どうぞー」と、ぐるぐるやる。



幼稚園の子も来る。保育園の子も来る。本当は 中学もうまく巻き込みたいなと思うんだけど、ま だそこまではない。

### 15. 参観から参画へ(保護者・地域の変容)

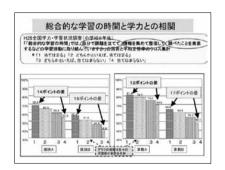
研究も全部、公開します。「研究授業、よかったら見に来てください」って言うとユネスコスクールのことをPTAだよりで取り上げてくれる。その中身ですごくよかったのは、「保護者がサポートできることは何でしょう。保護者同士がお互いに信頼し合っていくこと、そして地域の一員として学校や地域の活動に参加することです。それから子どもの生活が世界とつながっているという意識を持つことは、親にも大事だと思います」。こう書くんだよ。素敵だと思いません?

で、交流会をしたりします。遠藤先生にはこれに来ていただいたんです。先生はこの場に実践を持ってきてくださって。沖縄の慶良間の、シカと自然保護の問題と、子どもたちがどうしたか発表したり、集まった方たちも情報交換したりながら、学びを深められる。こういう場もつくっているんですね。

今まで参観してた親が参画するようになる。地 域も参画するようになる。 こういうのが大きな変 化です。

#### 16. ESD は日本の学力を向上させる

最後にこんな話をします。総合の学習をやると ね (どういうことが起きるか)、という。

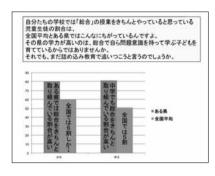


このグラフの中の1というのは、自分で課題を立てて情報を集めて整理し、調べたことを発表するなどの学習活動によく取り組んでます、ほくたちの学校ではこれはよくやってます、と答えた子たちのグループです。4は、うちの学校はそんなのやってないと思います、と答えた子たちです。

国語のA問題という基礎・基本の問題の学力 で比較すると、学力学習状況調査で14ポイント の差が出たそうです。B問題、応用・活用の問題 では、18ポイントの差がついたそうです。算数 ではどうでしょう。同様に大きな差がついたそう です。

中学もこういう結果が出ているそうです。この データ、文部科学省の田村学さんが、「こんなの を作ったんで、よかったら紹介して」と言って、 下さったんですね。

学力が高いといわれているある県の子どもたちでは、「私たちの学校では総合をきちんとやってます」と答えた人が8割を超えました。全国平均の小学生6年生では、6割しかいない。そしてその県の中学校でも8割の子どもたちが「総合学習をしてます」と答えました。全国の中学校では総合の学習というのは、寂しいことに5割ぐらいしかきちんとやってないといわれてます。



残念なことに東京都では、この調査が出たあと 東京都中の校長を集めて、基礎・基本が徹底でき るように、どんな子でも前の学年で九九ができな くてそのまま上がっていく子がないように、徹底 してドリルでトレーニングをしなさい、こういう 指示が出ました。調べたり、発表したりというこ とについての指示は一切ありませんでした。ほん とにこれで学力は高くなると思ってるのかなあと 私はびっくりしたんですよ。

つまり学力というのは、その子の持っている氷山の、水面の上に出ている部分でしょ。これがテストやなんかで測れる部分です。これを高めるために、ここの部分だけを積み上げていったら、この部分が大きく高くなるんじゃなくて、下がなかったら、これは沈む。そういうもんだと思うんですよ。

つまり、こちらの学力をきちっと学習させて、

そしてしっかりした生きる力を育てて、学習はおもしろいだとか、これが楽しいだとか、活用していくことがすごい価値があるとか、あそこで学んだことがここで使えるぞとかいうような、こういう学びをいっぱい持ってる子は、それを生かした学びを積み上げていくこともできるし、その結果として出てくるものが大きくなってくると思いませんかって感じるんですよ。

そういうことを考えなしに、<u>詰め込みをやった</u> <u>ら学力が伸びるというふうに考えるのには疑問を</u> 感じますね。

最後に日本から(の発信)。今年は日本のESD10年の取り組みの最終年ですね。それはやっぱり総合っていうのが日本にあって、これはほんとに価値あるものなんだということを世界に発信していくことが大事なんじゃないかと思います。そしてそういう学びのあり方を、日本ではこういう成果が出てますよということを発信し、また一緒になってそういう子どもたちを育てていきましょうと。お互いを人として尊重しあえる子どもを育てて、一緒にこの世の中の厳しい問題にも立ち向かっていく。そういう教育を進め、いい時代をつくる努力しませんかという、そういう発信をしてもらいたいなと思ってるんです。

そんなところで時間が来ました。どうも失礼しました。

M-cafe 7 では手島先生の講演に併せて、都城市立丸野小学校の河野正仁先生から「学びに火をつける」授業の実践報告をしていただいた。田んぼの生き物を調べ、調べた事をまとめ、発表することを繰り返しながら、作文の力、発表の力、人の意見を受け入れる姿勢、主体的・積極的に取り組む姿勢など、いろいろな力が子どもたちについたという報告があった。ESDで子どもが変わるという興味深い内容であり、詳細は改めて報告することとする。



講師:手島 利夫 東京都江東区立八名川小学校/校長

日時: 2014年 3月 1日(土) 13:30~15:30 [13:00開場] 場所: 南九州大学 都城キャンパス 学生交流会館

宮崎県都城市立野町3764-1 電話:0986-21-2111(代)

入場無料(当日受付可、事前申込み優先)

主催:南九州大学 人間発達学部附属 環境教育センター

